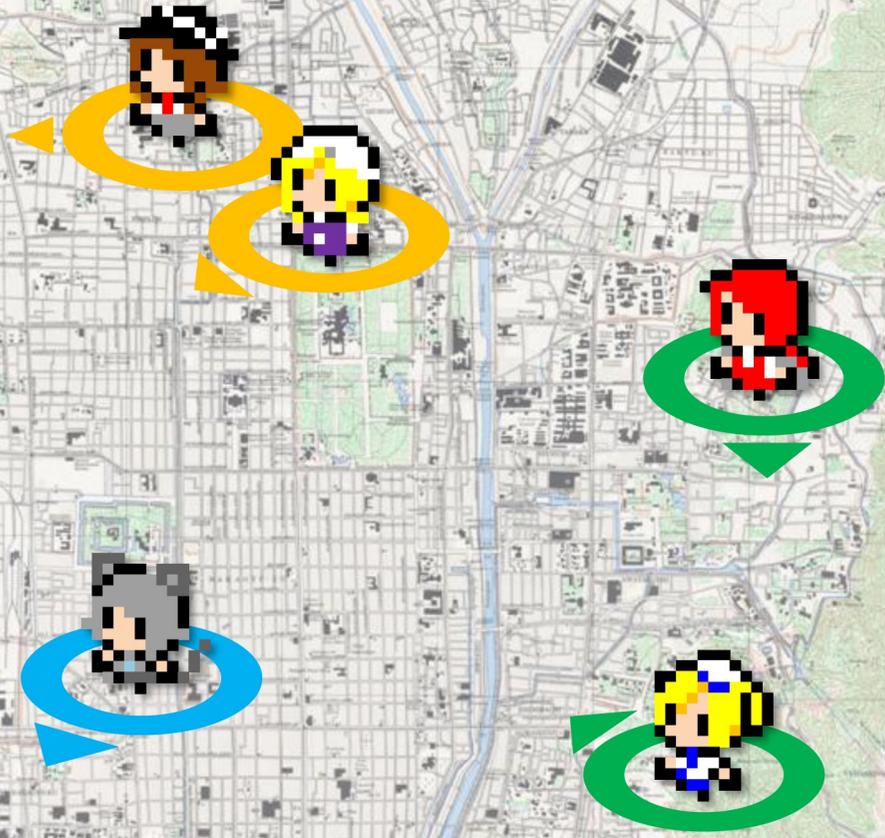




# NO MORE SILVER BULLET



# No more Silver Bullet

■■■■Friday, November 4, 2065 at 10:03 ▼

京都の空は今日も心地よい秋晴れ。

順調に待ち合わせの時間に遅れながら、19世紀末のモダンな街並みを再現した合成レンガの赤道を、白兔を追いかけるアリスの気分です速める。

【……つまり、また遅刻なのね?】

【複雑な事情があったのよ。具体的にはレポートの期限とか】  
視界の四分の一ほどを埋めてポップする仮想ウィンドウで、メリーが呆れる。丁寧な事にアバターには感情拡張子付きだ。携帯端末を経由して接続したお互いの P A N を介し、メリーの側も私のアバターを通じて会話している。

</dictionary>

<item> 【拡張現実 (AR)】 </item>

<description> 視覚と聴覚の一部に、リアルタイムで感覚処理を施した『拡張した情報』を上書き表示する技術。科学世紀の新たなパラダイムでは医療触媒の投与で角膜上に形成される生体官能分子の受容体コンタクトレンズと、小脳の特定部位に共感覚学習パターンを付与する電脳処置の組み合わせで実現する。 </description>

</dictionary>

端末を開いたまま走る私の視界に、交通安全の注意を促すマーメッセージがポップ。メリーとの秘匿通信を邪魔するウィンドウをうんざりした気分です曇み、メリーに通信を送る。

【大体、前時代的なものよ。このご時世に学生はプログラム通りの課題をこなすべきなんて、仮にも最高学府で教鞭を取る人間が口にしていいことじゃないわ】

【それで専門でもないことに三日も徹夜して三〇〇頁？ 蓮子が上手く乗せられただけじゃないかしら】

【……三時間は寝たわよ】

</reference>

<title>統一力場における観測と不可視観測点における論

説の因果関係 </title>

<author>宇佐見蓮子 </author>

Last updated: Friday, November 4, 2065 at 05:34

File size: 1339kb

</reference>

欠伸をカフェインガムで噛み殺し、吐息。実際ムキになって取り組んでいた事は否めない。自分から卒論のハードルを上げてしまったわけで、メリーの指摘は正しかった。

【そう言う訳だから、十五分くらい遅れるわ】

【わかったわ、今日は連絡があるだけマシね。待ってるから】

【ん。愛してるわ、メリー】

【……馬鹿】

呆れつつも、気を付けてねと追伸秘匿通信を切る。

通話終了に合わせ、電脳を介した通信記録に対応して近くの電子タグからのスパムが沸いてきた。私は顔をしかめフィルタ

の密度を上げ、邪魔な広告を切り落とす。有効利用期限の切れた無料版メールソフトの弊害とはいえ、広告抑制マグのために月四〇〇新円も払う気も起きず、ずるずると更新をサボって現在に至る。

端末を操作し視界のレイヤを切り替えれば、道行く人々の公開通信ツイートクラウドが流れてゆく。一ドットの欠けもなく描画されたスクリーンめいた青空は、秋に相応しい紅葉の鮮やかさを添えて美しく彩られていた。

メリーとの待ち合わせは烏丸だ。移動には徒歩も考えたが、路面電車を使うことにした。駅まで迂回する時間を考えるとそれが一番早い。

旧さを残す街並みの調和を乱さぬよう、景観条例に配慮したポップ広告が、秋の新商品を控えめに宣伝する。フィルタを潜るよう情報に重みづけをするには高額の広告費用と社会貢献が要求される。あれ一枚に一体どれだけコストがかかっているのか、ぼんやりと想像して時間を潰した。

情報通信技術が世界をくまなく覆い、現実の上にもう一枚、拡張現実の層を上書きするようになって二十五年。人々はその恩恵を当たり前のように享受している。かつてのこの国で、水と安全が空気のように無料だと思われていた頃のように。

過ぎ去ってゆく人の流れ、公開通信のツイートクラウドの中で、ふと視線が固定されたのは——景観条例などどこ吹く風と無尽蔵に溢れるAR広告の中で、酷くそれらから浮いている色合いがあったからだ。

「……ん？」

街頭端末、観光者向けの案内板の前。

鮮やかな秋の京都の空から追い払われた曇天のような、グレーのパーカーを着た女の子がいた。

短いスカートに短いソックス。背は低めだが、スカートから覗く足はすらりと細くまぶしい。被ったフードの下から覗いた色の薄い髪を弄りながら、難しい顔をして案内板と手元のメモとを頻りに見比べていた。

このご時世に、紙媒体のメモを好む人は希少だ。わざわざ高張る筆記用具を用意しなくても、ARはほぼ全ての記録手段に対応しているし、それらの適わない専門的で複雑な情報のやり取りは端末を用いる。今世紀の初めごろまでは紙の記録も並行して用いられていたが、現在の電子媒体はその黎明期のように脆く儂いものではなく、あらゆる情報をほぼ永続的に保存を可能にしている。経年劣化という観点で見れば、石板に刻んだ楔文字のほうが保存面では心もとないとされるほどだ。

それでも敢えて紙を用いるのは、よほどの好事家か愛書狂であるか、偏執的に電子的な手段に記録を保持することに忌避があるか（ARによって他人の頭の中を覗かれる、と言う妄想は拡張現実の発展の過程で多く報告された症例だ）、あるいは——ARへの未対応者であるのか、だ。

</dictionary>

<item> 【京都】 </item>

<description>この国の首都。前世紀から今世紀にかけての国家一大事業となった神亀の遷都により、二百年を経て正式に首都となった。特筆すべき点として拡張現実（AR）が生活の基準となり、出生登録と同時に電脳処置が推進されていることが挙げられ、住人のARへの対応率は99.85%（二〇六五年八月現在）を越えている。

</description>

</dictionary>

「電腦のサスペンドを解き、念のため彼女のPANを探るが、ARを使っているなら当然感知されるはずのそれも見当たらず、公開プロフィールも未登録。普通なら自主的に電腦を切つていないか、高度な自閉状態にあるかのいずれかが考えられるが、どうもそうとは思えなかった。」

「——おそらく彼女、ARが読めていない。それがこの街でどれほどの不便を被るか、私は身をもってよく知っていた。」

「メリー、悪いけどやっぱもう少し遅れるわね」  
 秘匿通信でメリーにメッセージを送る。すぐに返ってくる抗議のメッセージを読まずに畳み、私は道路を渡って彼女に話しかけた。

「ねえ」  
 「うん？」

近付いてみれば、随分と小柄な女の子だった。目深なグレーのパーカーのフードから覗く大きな目が注意深さや警戒心の強さを感じさせる。

私もあまり背の高い方だとは言いが、頭一つは下から警戒を隠さない鋭い視線がまっすぐにこちらを見上げてくる。

「なんだい、君は」

むつつりと不機嫌を隠さない視線は、まさか話しかけられるとは思わなかったと雄弁に語っていた。ARの感情拡張子に慣れているとつい忘れそうになる、拡張現実加工されていない生の感情を向けられ、私は少しばかりたじろいだ。

「勧誘なら間に合っているよ」

予想通り、明らかにARの接続距離なのにPANが反応しない。それは取りも直さず、彼女が電腦に関する一切の支援を受

けていないことを示していた。

「どうにも歓迎されている気配ではないが、それは無視して先を続けた。」

「もしかして困ってないかしら？ なんだったら——」

「構わないでくれ、と言っただろう」

間髪入れず拒絶の言葉。有無を言わせない強い口調で、高精度の防壁よりもなお分厚い、明確な拒絶の壁が私の言葉を跳ね返す。

「お困り事はございませんか？ こちら、小兎姫の相談サービス、ただいまオープン一周年記念に付き初回相談料無料。料金一〇%OFFキャンペーン中！」

「お困り」発言をトリガにポップしたスパムウィンドウを畳み、フィルタを再調整している間にも、彼女は私に背を向け、案内板に向き直っていた。もう話すことはないとはばかりの素っ気ない態度。

しかしそんな彼女の襟元から、チウ、と小さな鳴き声。

パーカーのポケットからちよこんと顔を覗かせたのは、長毛の白いネズミだった。彼(?)はたまた素早い身のこなしで彼女の肩へと飛び乗り、困惑する彼女の目を見つめながら忙しく鼻先を動かしながら前足を擦りつける。

「む。……いや、しかし……ん、むう」

まるで彼女を窘めるように鳴くネズミと、まるで会話でもしているように言葉を交わし、彼女は困ったように頬をかいた。

「……わかったよ。ええと、君」

す、とこちらに向き直り、彼女はぺこりと頭を下げた。決まり悪そうに視線を反らし、

「すまない。失礼なことをしてしまった。……その、少し意地になっていたようだ。せつかくのご厚意に不躰なまねをしてし

まうところだった」

「そうだぞ、とばかりに白ネズミがちうと鳴く。勘弁してくれとばかりの困り顔。どうやら私はこの小さな毛むくじやらに助けられたらしい。」

彼女はもう一度、改めて頭を下げた。

「つまらないことに意地を張ってしまふのは私の悪い癖だな。申し訳ないが許してもらえないだろうか。この通りだ」

「気にしないで。京都は初めてかしら？」

「以前には何度かね。久々に来てみたら大分様子が変わっていて驚いていたところだ。正直、道もよく分からない」

「京都のA Rへの依存っぷりは半端ないからね。私もこの出身じゃないけど、もう少し非A R対応者にも配慮があつていいような気がするわ」

現実問題として、科学世紀の京都において、A Rに触れられないことはそれだけで多くの不自由を被る。本来、先天的なハンディキャップを埋めるために発展したはずのA R振興政策が、気付けば電子化されていない人々を置いてきぼりにしてしまつていふというこの現状は、A Rの普及率の影に隠れてしまつていふ潜在的な問題だろう。

その事を説明すると、彼女はなんとも渋い表情をする。

「……そういう理屈か。探し物は得意なつもりなのだが、地図の読み方一つも分からないというのも格好が付かないな」

彼女が睨めっこをしていた案内板の地図は京都広域をフォロ―するものだ。スペースの都合もあつて駅近辺のものを覗けば視覚情報としては最低限の情報しかない。A Rであれば同時に望む場所の詳細情報が表示されるが、彼女にはそれが読めなかつたのだ。

「あつちの案内所で、A R対応機器が借りれるわ。着いてきて」

「む、すまない」

「行政府もまったく手放しというわけではない。主に国外からの旅行者を対象に、京都での行動を不自由なくこなせるよう、A Rグラスが無料で貸し出されている。医療触媒か電脳、どちらの処置を受けていけばその補助機器で済むのだが、彼女はそのどちらも持たないレアケース。」

従つて、必要なのは電脳を備え、生体電位で駆動する知性眼鏡インテリジェントグラス。端末も組み込まれた一種のウェアブルコンピュータだ。とは言えこれも完全なA Rへの対応を約束するものではなく、公共サービスの定番として最低限の動作保障しかしていない。微細な感情補正やフィルタの機能など、最新鋭のA Rには追従できないだろう。

もっとも、そんなものに拘るのはよほどのヘビーユーザーだけで、ただ道を歩く上で不便はないだろうけど。

物珍しげに赤いフレームのA Rグラスを受け取り、彼女はそれを身に付ける。

「最初はちよつと戸惑うかもしれないけど、慣れればいろいろ便利よ」

「……おお」

レンズ越しの視界を確かめるように周囲を見回し、きよろきよろと確認する彼女。おそらくいま、視界を埋め尽くすA R広告と公開通信描画の洗礼を受けている最中だろう。

この知性眼鏡、度は入っていないが、要するに限りなく解像度を上げたディスプレイを視界全体に埋めるようなもので、慣れない人は徹底して慣れない。京都ではそれらは電脳対応障害として治療されるべきものとされるのだ。

「……ふむ。大体こんな感じか」

一通り使い方を説明すると、彼女はすぐにそれに慣れたよう

だった。フレームに触れる仕事はなかなか堂に入ったもので、さつきまでARを使えなかったとは思えない。これなら大丈夫かと判断して、私はポップした公共PANの公開通信を經由して、案内板の読み方を伝える。

「――古道具屋？」

「うむ。少し探し物をしていてね。ついでで聞くのは心苦しいが、このあたりでそんな店に心当たりがないだろうか」

聞けば彼女、上司に頼まれてあるものを探しているのだという。美術品の類であるらしく、事によったらそんな店に並んでいる可能性があるのだとか。

「その人が失くしちやっただんでしょ？ 厄介な話ね」

「まあ、いつものことだからね」

厄介事を押しつけられたはずの彼女の口調には、苦々しいものはまるで混ざっていないかった。本当に言葉通りの日常なのかもしれない。

「んー、そうねえ。お勧めの飲み屋ならいくらでも教えられるけど――」

「それは乙女としてどうなんだい」

慣れたもので、呆れを示す感情拡張子が彼女のPANに飛び出した。

いわくつきの怪しげな古道具は倶楽部活動の範疇と言えなくもない。私も教軒、そうした店を知っているが、さすがに市内を網羅するほど詳しくはなかった。端末を引っ張り出して検索を試みる。

いくつか条件を加えて候補を絞り込むと、御池から丸太通りへ抜ける寺町通りの近辺には、そういった小道具や民芸品を扱う店が複数ヒットした。おおむね私の記憶とも合致していた。

「このあたりかな」

彼女にARグラスの操作を促して、PANを接続。招待した彼女の電脳にゲスト権限を付与し、検索結果に街頭カメラとサテライトビューの画像を添付して送りつける。

「何度か冷やかした程度だけど、そのあたりじゃないかしらね」

「成程。済まない。何から何まで世話になつてしまったね。」

なにかお礼ができればいいのだが

「気にしないで、持ちつ持たれつよ」

そう言つて手を振ると、彼女の肩から飛び降りた白ネズミが私の指先にちよんちよんと鼻先を触れさせた。彼なりの感謝を示してくれたらしい。なかなか賢い。

ぺこりと頭を下げ、雑踏の向こうに消えてゆく彼女を見送つてしばし。私はトラムを2本、乗り過ごしていたことに気づく。メリーからのメールの山に気付いたのはその少し後だった。

■■■Friday, November 4, 2065 at 11:21▲

「――はあ、やつぱり信用するんじゃないわ。珍しく連絡してきたと思ったらこれだもの」

「悪かったつてば。おひさまの出てる間は時間が分からないのよ」

いまだにお怒りのメリーさんは、その鬱憤を晴らすかのよう  
にゲーキにざくりとフォークを突き立て、大きく切り分けて口  
に運ぶ。なかなかワイルドな食べっぷりながら、音も立たな  
ければ欠片をこぼしもしない。

「んむ。それにね、別に悪いことしてたわけじゃないのよ？」  
「……もういいわ。蓮子が遅刻することにはいちいち怒ってたら友達なんてやっつけられないもの」  
予定より一時間十四分遅れで合流した私達は、四条通のカフェへと場所を移して、今日の本題である今季の新メニューの品評会を行っていた。

秘封倶楽部、久々の女子力に溢れる会合である。面子に変わりが映えないというのが少々寂しいかもしれないが——この活動に新メンバーが加わる事はちよつと想像が付かない。

私の頼んだガナツシユは少々合成品らしさが鼻につき、味のムラのなさ——甘みが揃い過ぎてるのが気になったが、メリーの注文したベイクドチーズケーキはなかなかの逸品である。これでカロリーも抑えてくれれば言うことなしなのだが、他者の命を食べることなく食事を出来るようになった現在でも、それらに目立った改善は見られない。乙女としては一番肝心なところではないかと思うのだけでも。

「——メリー、ちよつと食べすぎじゃない？」

本日3つ目のケーキにフォークを付けたメリーのPANに、健康的な食事を取るための糖分の過剰摂取を主張する警告メッセージがポップ。情報を共有する私の視界にも割り込んでくる健康管理ソフトの警告を、メリーはぼいっと背後に投げ捨てた。仮想ウィンドウはぱりんと軽い音を立てて割れ、視界から消える。

「蓮子は律儀ねえ。古来、美味しいものは身体に良くないって決まってるの」

それは料理への冒険じゃなからうか。

「だから、今時ブラックで珈琲なんて正気の沙汰じゃないのよ」  
「へいへい」

メリーの指摘通り、私もカフェインの摂取量は成人女性の許容量をはるかにぶちぎっているのでまったたく人の事は言えない。いかな管理社会と言えども、人間の業とも言うべき自堕落さは根が深いのである。

「カロリー摂取の問題は置いとくとして、拡張現実がもつと発展すれば、味覚や嗅覚の感覚拡張くらいどうとでもなりそうなものだけだね」

「どうかしら。食べ物がみんなハンバーグの味になるなんてぞつとしないわ。個々の主体的な認識が揺るがされれば、人の禁忌だつてあっさりと言われちゃうと思わない？ 極論、人間の肉の味まで好きなように操作できたら、今より肉食は一般的になると思うのよ」

「蓮子は前時代的ねえ」

新茶道の影響を多分に受けたと思われる抹茶オレを傾けるメリーに、秘匿メッセージで苦笑。相対性心理学専攻のメリーは、仮想と現実の境界はシームレスに繋がっているという主張の持ち主だ。これはメリーに限った事ではなく、ARに生まれた時から接している京都育ちの若者には多く見られる傾向である。東京の田舎生まれの身としては、現実と仮想を等価にみる視点は、いまいち賛同し難い。

「で、それからどうなったの？」

「さっきの話？ いつも通りよ。ふらふらしてる間に、気付いたら眼が覚めてベッドの上」

私とメリー、二人が顔を揃えて秘封倶楽部の活動以外が行われないことはない。今日の話題も、メリーが夢の中で訪れた境界の向こう側の世界の話だった。

メリーが夢の中で境界を飛び越え、時間も空間も隔てた異邦で、さまざまな不思議と邂逅する。それらの話題は少し前まで

は我らが秘封倶楽部の活動の根幹を為す貴重な体験だったが、鳥船遺跡の一件以来、どうにもその価値は揺らいでいた。

伊弉諾物質を探す活動が倶楽部活動のメインになり、こちらの世界にも不思議の痕跡は山のように転がっていることが分かったことがひとつ。そして、正直もう割と慣れっこになってしまっているのがひとつ。

「今回は何を持って帰ってきたの？」

「筍よ」

「……また？ ああ、見せなくたっていいわよこんな所で」

このやり取ももう両手の指にも余るほどだ。メリーはいつものように夢の向こうから収獲物を持ち帰ったらしいが、これまた珍しいものではない。

「そういう言い方はないんじゃないかしら」

「……だって、ねえ」

ここ最近の『収獲物』を保存・分類したタグを全部まとめて添付。秘匿通信でメリーに送りつける。PANの隣接で共有された仮想ウィンドウで、拾得物のリストがメリーの視界を埋め尽くしていった。

「もうその手のサンプルは十分よ？ いい加減目新しいものじやなきや、有難味がないわ」

メリーがあちらで何者かと遭遇するのはとても稀であり、持ち帰ってくるものもありふれた物がほとんどだった。

最初は未知や境界への手掛かりとなるかもしれないと躍起になって調べたりしたが、要するにただの木の枝や石ころやらである。管理されていない自然物であること、年代が現代ものもとは噛み合わないものであることは判明したが、そこから先、境界の向こうへと繋がる道筋についての手がかりとしては心もとない。

アカデミックな観点からすれば貴重なサンプルであることまでは否定しないが、そもそも違法行為である結果暴きのためにそれらの解析までするような伝手はさすがに持っていない。

「だからってぞんざいに扱っていいって物でもないでしょう」  
憤慨を示す感情拡張子を表示させつつ、律儀に表示された仮想ウィンドウを丁寧に畳むメリー。

「あのねメリー。持ってきてくれるのは結構んだけど、保存しとくだけでも一苦勞なのよ？」

メリーがわざわざ夢の中から持ち帰ったのだと主張しない限り、ぶつちやけてゴミのようにしか見えないものも多い。ただでさえ広いとは言いがたい我が家のスペースをぐんぐん圧迫してくれているため、先日、耐えかねてあまりにも意味不明な資料は処分したばかりだ。

「きちんと整理してないのが悪いんじゃないかしら。……もう少しきちんと片付けたら？」

「う。ちゃんとどこに何があるかは分かっているからいいのよ」  
収獲物はきちんと折半しているので、メリーの部屋も同様のはずなのだが彼女は面白がつてこれらを処分しようとしたくない。それだけ彼女の部屋に余裕があるという事なのだが——同じ一人暮らしの学生の身でどうなっただこのブルジョワめと内心微妙に穏やかでないのは私だけの秘密。

テーブルの上、筍をつついてメリーはこちらを見る。

「どうする？ 食べちゃう？」

「あんまり気が進まないなあ」

以前にも同じように竹林から持ち帰った天然ものの筍を、二人で料理して食べてみたりしたが——アクが強くて味も雑で、あまり食べられたものじゃなかった。合成食品ばかりで生きる科学世紀の少年少女にとって、天然食品はもはや希少性以外に

価値を持たないらしい。

>quotation>

栄養デザインの進歩で作られた合成食は、味や匂い、触感についても天然の素材を凌駕していることが証明されて久しいが、なお昨今でも人間は天然物を歓迎する傾向にある。ただのもの珍しき、希少性以外の理由で天然物を要求するのは、舌や喉の感じる味以外に、人間には魂のデザインレベルで他者の命を口にすることが本能的に備わっているのではないか。

>/quotation>

>/the>科学世紀の食育に関する考察>/the>

>author>K / 矜羯羅 · 著 >/author>

【異議…蓮子も私も料理が苦手だって可能性】

【…異議を却下します】

不毛な会話を打ち切って、ARのウインドウを切り替え、メリーの話してくれた夢冒の内容をまとめたメモを表示する。

「……お地蔵さんの沢山並んだ道、ねえ。前に歩いてたお寺かしら。あった、これだ」

端末を起動し、メリーのいう条件に当てはまる場所を光景を探索させるが——該当件数が多すぎて表示にエラーが出た。絞りこもうにも条件が曖昧すぎてそれ以上は難しい。

メリーが夢の中で迷い込む境界の向こうの世界に付いて、記録を取りはじめたのはもう結構以前からのこと事だ。夢日記のログはそれなりの分量になっていた。

ただ、いつもいつも衝撃的な場面に出くわすのかというところまで、まったくそんなことはなく。その多くは森の中や広い草原、湖の

ほとりなどを歩く程度の、実にささやかな体験ばかりである。人の手の入らない自然というのいまの時代には珍しいものになりつつあるので、決して馬鹿にしたものではないのだけ——それは学術的な見地からの意見だ。

「私としてはやっぱり、いつかのトリフネみたいな非日常が欲しいのよねえ」

呟いてテーブルに突っ伏した。この空の遥か38万キロの彼方、L4ラグランジュポイントに静止する衛星トリフネの中に満ち満ちた不思議と大自然。隔壁1枚向こうには虚無に近い真空に満ちた宇宙のただ中に再現された、過去の地球の環境を歩く旅——今でも脳裏に鮮明に蘇るあの体験はいまだに味わい深い。だというのに、メリーさんとしたらケーキを食べなごらいま思いついたとばかりに言い出すのである。

「あ、衛星なら先月に行ったわよ？」

「もー、事前に分からなきや準備もできないじゃない」

やめやめと両手を放り投げるゼスチャアをしてARレイヤを切った。

あれ以来、メリーのしている光景を共有できるようになったのはとてもありがたい事だけれど、彼女が境界を越える時にいつもいつも私が傍に居るとは限らない。どうにも巡り合わせが悪いのか、最近はそのような貴重な経験の度に置いてきぼりをくらうことばかりだ。

「ずるいわよメリー、あつちに行くなら教えてくれなきや」

「そんな事言われても。夢なんていつ見るのか分からないし」  
「不貞腐れた私はぶー」とテーブル上の紙ナプキンを吹いて飛ばす。汗をかいたグラスに触れて張り付くナプキンを剥がし、メリーは行儀悪いよと眉を潜めてみせた。

メリーが境界を越える夢を見る条件を探してみたことがあつ

たが、いくらサンプルを増やして解析しても、規則性は全く見られなかった。そもそもこの夢日記自体、その条件を探すために付け始めたものだ。今はだいたい惰性になってはいるけれど。

「でも、何か手段はあるでしょ？」

「私、眠ってるのに無茶言うわねえ……。じゃあ、いつそ一緒に住む？」

「それもいいわね」

悪くないな、と思いつながら、カップに口を付けた。やや冷めた珈琲の苦みが喉を落ちてゆく。健康への影響を訴える五月蠅い警告メッセージを畳み、荷物が増えるからメリーの家に引越すのが良いかなあ、などと想像を巡らせる。

「でも、蓮子と一緒にだあつという間に部屋が散らかりそうねえ」

「失敬な。あれはあれでちゃんと機能性を保持してるのよ？」

「この前貸したロッカーの鍵」

「う……」

タグの設定をサボっていたせいで、ARリスト表示でも探せない状態にある。熱力学第二法則は乙女の部屋においては未だに有効な理論だ。そもそも目的のものが視界に入らなければ拡張現実もまったく役に立たないのであつて。

「でも最近、ちよつと活動がマンネリなのは確かね。そろそろまたどこか旅行でも行きたいところだわ……つと」

メリーが退院してからは伊弉諾物質を探するという名目で遠方での活動に精を出したが、学生の身でそうそう頻繁に遠出ができるような財力があるわけがなく、最近はおつぱら京都から日帰りできる近郊での活動がほとんどだ。そろそろ新しくバイトでも始めるべきだろうか。

丸まってしまった背中を伸ばそうと、椅子の背もたれにぐっ

と反りかえつて後ろを見る。

「もう、お行儀悪いわよ蓮子」

メリーが苦笑と共に秘匿メッセージを飛ばす。と、

「……あれ？」

反り返つた背中、上下さかさまの視界の中に、ついさっき別れたばかりの見覚えのある姿が一つ。

「おや」

彼女もすぐ私に気付いて声を上げた。

シンプルなデザインの赤いアンダーフレームのARグラス。グレーと紺のシックな装い。曇天ならばともかくも、ARで加工された京都の青空の下では些か目立つ色合いだ。

忘れようはずもない。さつき会つたあの子に間違いなかった。

「なんだい、君もこちらに用事だったのか」

「さつきぶりね。……でも、どうしたの？ 寺町通は反対側よ？」

「……なんだつて!？」

現在位置の座標タグと地図を添付して彼女に公開メッセージを添付、彼女は少なからず驚きを露わにして、それを見比べた。

二度、三度と繰り返し、やがてがっくりと肩を落とす。

「なんということだ……これはいよいよ本気で焼きが回つたか……?」

よほどショックなのだろう、ふらりと近くの植え込みのボックスに寄りかかり、ぶつぶつと独りごとを呟き始める。

「ふふふ、酷い様だな……賢将が聞いて呆れる……。所詮、いかに賢しく振舞おうが卑賤なネズミ風情と言ふことか……ふふふふふ……」

みるみる瞳からハイライトが消えてゆくのはARグラスによる感情拡張子の補正効果だろうか。大分自虐が入っている彼女

を不思議そうに見て、メリーが首を傾げる。

【その子、蓮子のお友達？】

【さっき話したでしょ。駅のところであつた、探し物をしてるつて言う】

【ああ】

ぼむ、と手を叩いてメリー。

「大丈夫？ やっぱりA Rは慣れなかった？」

「あ、うむ……忠告に従ったつもりだったが、どうも私は自分で思っていたよりも抜けているらしいな。少し、人生について本気で悩みたくなつた」

あまり立ち直れてはいないっぽい。どうにも方向音痴なのだろうか。あるいは、A Rにはやっぱりある程度の慣れが必要ということか。どんなに精巧な地図や案内板があつてもその土地に不案内であれば迷つてしまうことはあるかもしれないけれど、

「蓮子と同じに考えちゃ失礼じゃないかしら」

「うーん。そんなややこしい教え方したつもりなかつたんだけどなあ」

確かに私の眼は少々特別製だ。特に夜であれば、GPS機能などよりもより確実に現在位置を覚えてくれる。

A R未対応の山中での活動にもとても役に立ってくれているのだが、初めて訪れる場所であってもその座標が把握できれば、否が応でも普段の活動で土地鑑は鍛えられてしまうのかもしれないなかつた。

彼女を慰めるつもりなのか、ポケットを飛び出した白ネズミが彼女の肩に飛び乗り、頬を擦りつけてチウ、と鳴いた。

わ、とメリーが顔を輝かせる。

「その子、あなたのペット？」

「あー……うむ。まあ、そんなものだね。相棒だよ。触ってみ

るかかい？」

「いいの？」

小さくてもこもこしたものに目のないメリーさんが差し出した指先が、小さな頭に触れる。器用に後ろ脚で直立した白ネズミは、こくりと首をかしげた。

「わあ……ご飯とかあげても大丈夫かしら？」

「ん？ ああ、それは構わないが……」

メリーは先程のベイクドチーズを少し削り、手のひらに載せて子ネズミの前に差し出した。主人のほうをちらりと窺った彼は、特に咎められないことを理解したか、両手でそれを受け取り、一心に齧り始める。

「きゃー♪ 蓮子見て見て、この子すごい可愛いっ」

ぶんぶんと腕を振り回すメリーの感情拡張子が溢れだして視界を埋め尽くした。ちよつとメリーさん、感情制御マグの調整甘すぎやしませんか。

【……伴侶動物かしら？】

</dictionary>

</item> <item>

</description> </description>

より主人と密接な関係を持つ、生活のパートナーとなる動物の総称。科学世紀においては生体電脳でA Rを経由し主人との感覚リンクを確立、視覚や聴覚などの補佐を行う動物を主にこう呼ぶ。 </description>

</dictionary>

直接問うのは失礼にあたると思つたか、メリーは秘匿通信でこちらにメッセージを送つて来た。メリーの疑問は、彼女がな

にかしらの障害を抱えているのではないかというものだ。

ペットに助言役を求めているあたりその読みは当たっているように思われたが、そもそもげっ歯類は遺伝子調整でもしなければ伴侶動物には不向きである。その割には白い毛玉君にはデザインドアニマルとしてのパーソナルタグも保存されている様子がない。

(……素直になるための外部補佐、あたりかしらね)

その思考は言葉には出さず、思い浮かべるだけにとどめた。「本当にこの街は変わってしまったんだな。……昔とは見違えるくらいに綺麗になったが、少々寂しくもある」

しみじみとつぶやくその独白は、まるで、昔のことは見てきたようだった。どう見ても私より年下の彼女だが——案外そうでもないのだろうか。

【——分らないわよ、案外良いお歳なのかも】

【回春処理なんてまだ一般には普及してないと思っただけだね】

</reference>

</title> 「人類生物学にみる不死」 </title>

<author>研究者：西東天</author>

<author>共同研究者：木賀峰約</author>

</reference>

不老化処置はすでに夢の技術ではない。見た目と年齢に統一性がなくなっているのも確かだ。若年であれば出生登録に際して電脳化とAR対応処置も施すのが最近では通例だし、案外メリーの指摘も外れてはいないのかもしれない。

「しかしこれからどうしたものか……」

「私達が案内するわよ。もうここまでくれば知り合いみたいいな

ものなんだし」

「あ、……うむ。済まない。恩に着るよ」

彼女と子ネズミ、主従は揃って。こり、と頭を下げる。

「こちらからお願ひしたい。二度も助けられていては格好がつかないが」

「気にしない気にしない。ね、メリー？」

「お人好しねえ、蓮子は。このままケーキ食べ放題よりは健康的なだけだ」

「なんだ、メリーも気にしてたんじゃない」

嫌な顔せず付き合うメリーも似たようなものだと思う。

「ええと、私は宇佐見蓮子、こっちはメリー」

「自己紹介まで勝手に略さないで。マエリベリイよ。マエリベキ・ハーン」

</Profile>

</Name>宇佐見蓮子</Name>

<Age>—</Age>

<Class>超統一物理学一年</Class>

</Profile>

</Profile>

</Name>Maribel Han</Name>

<Class>相対性心理学一年</Class>

</Profile>

呼びづらければメリーでも構わないけど、と付け足すメリーに、彼女もそうだね、そうさせて貰うよ、と応じる。

自己紹介とともにPANをオープンして、公開用の身分を示

した。彼女もそれに倣おうとするが、彼女のPANに表示されるのはゲスト権限であり、ARグラスを借りた時の素っ気ない無記名登録がそのままポップするだけだった。

それに気付いたのだろうか、

「私は、ナズ——」

胸に手を当て——僅かに言い澀んで、名前を告げた。

「ナズナ、という」

「ナズちゃん？」

問い返す私に、彼女はなぜか少し面白そうにはにかむ。

「まあ、好きに読んでもらって構わないよ。よろしく頼む」

「ええ、こちらこそ」

「よろしくね、ナズナちゃん」

かくして。科学世紀の京都に出会った私達三人は、しっかりと握手を交わした。

■■■■Friday, November 4, 2065 at 13:07▲

「このへんかしら」

「ほほう」

もはや一般的な観光地となった寺町通りからさらに一本路地を抜けた先。人通りもまばらな細い街路に、ひっそりと身を寄せ合う店舗が軒先を並べていた。事前知識がなければただの民家と通り過ぎてしまいうような店先を注意深く眺めれば【萬買取致し】の看板が掲げられていた。

曇りガラスの戸の看板に陽に焼けたショーケースを並べた街並みは時代から取り残されたようなレトロな色合い。AR対応も最低限のものしか施されていない。AR広告も数世代前のもので、フィルタを外してやっとなポップするような控えめなもの。ここまで来ると時代的価値を賦与する演出のなのかもしれないが、だとしたらこの汚れ具合、経年劣化はどれだけ金を掛ければ実現できるものとも知れず、結局はどちらなのか判然としない。

「ところで、探し物っていったいなんなのかしら」

「……一言で言うのは難しいんだが、強いて言えば古い美術品だな。ランプと言うのが一番相応しいような気がするが——」

外見を説明しようとするナズちゃんだが、いまいち要領を得ない。メリーが鞆からタブレットを取り出した。

ナズちゃんはそれを受け取り、しばし思索の後にペンを走らせる。描き出されたのは非常に前衛的なデザインだった。

「こう、こんな感じの……」

「……おでん？」

「……」

肩を落とすナズちゃんに、白鼠が励ますようにちうと鳴く。

どうにも、店うんぬんよりもこのあたりに探し物がある事を確信しているような口ぶりだ。探し物の存在だけ分かっているなんていうのも妙な話である。そう尋ねると、

「ああ、それは簡単だ。私の特技だね」

彼女は胸元のペンダントを首から外して指に絡めた。細長い八面体の結晶を模したしゃらりと鎖が涼やかな音を立てる。

<Correction>

<error>ペンダント</error>

<truth><sup>Deppri-HE</sup>振り子</truth>

</Correction>

印刷したばかりのインクの匂いが残る紙媒体の地図の上、垂らしたペンデュラムの尖った先端が、不規則かつ規則的な動きで経路をなぞり始めた。

「——ダウジングね」

「蓮子、知ってるの？」

「大昔は割とメジャーなオカルト技能だったのよ」

<diclitionary>

<item>【ダウジング】</item>

<description>遠隔地から特定の物体や人物の場所を捜し出す能力・行為の総称。前世紀末にはその特性の解明が進み実用可能とされ、地下工事における走査や、犯罪捜査などにも使用された。</description>

</diclitionary>

しかし、注目を浴びたことでその原理を解明しようという動きが起きてから評価は一変してしまふ。結局そのメカニズムは一般化できず、しかも多くの能力者が示した結果がインチキであることが暴かれてしまったのだ。ダウジング技術自体が一気に信用を失い、さらにごくごく一部の例外であった『本物』も、その実現には特殊な才能、具体的には異能とも言うべき脳神経の発達が必要であることが判明したのだ。

【要するに、私達の眼と同じようなものよ。汎用的には再現不可能な、畸形の能力】

技術は誰にも利用可能であるからこそ価値を持ち、その進歩

によって人類を未来へと推し進める。ダウジングは人類のステージを新たな次元へと上げる、技術のパラダイムシフトたりえるものではなかったのである。

地図の上でペンデュラムを慎重に走査しつつ、ナズちゃんは難しい顔を覗かせる。

「間違いないこの辺りにある、と思うんだが——」

傍目にも分かった。振り子の触れ具合が微妙に不規則で、一定しない。ある程度の範囲は把握できるが、そこから目標を絞りこめないようだ。

「どうにも調子が出ないな。いよいよ私も焼きが回ったか」

「——たぶん、別に理由があるのよ」

肩を落とすナズちゃんに、この街に付いての説明をする。

神亀の遷都による京都是、全天候型完全AR対応都市のモデルケースとして設計された。多重構造結界《八重垣》と全天風水に基づき建造物を配し霊脈調整、空には衛星を打ち上げて星辰を揃えることまで行つたという。

強固な結界と多数の防壁に守られた京都是、前世紀末から今世紀初めにかけて頻発した地震と洪水——《大災害》からの復興を求めた政府と、その利権に食い込もうとした国内外からの資本の流入が合致した結果だとも言える。

「これは私の仮説だけど、ダウジングがそれらにアクセスしているなら、結果を含めた京都の地勢がそれを邪魔しているんじゃないかしらね」

「成程、厄介だね」

「でも、この辺にあるのは確かなんでしょ？ だったら一軒一軒見風潰しで探していけばいいだけのことよ」

「非効率的ねえ」

「どんなに科学が進歩しても、最後にものを言うのは積み上げ

てきた努力よ、メリー。さっき検索したリスト回すから、手分けしてばばとやつちやいましょ」

物理屋らしく実証主義の格言を口にし、先頭に立つて歩き始めたまででは良かったのだが。

「……あれ？」

「行き止まり、ね」

私達の探索行は、いきなり文字通り壁にぶち当たっていた。

「おっかしいなあー」

「これじゃナズナちゃんのこと言えないわよ、蓮子」

「ぐっ……ま、間違いは誰にでもあるわよ」

のんびりと言うメリーの言葉が胸に突き刺さる。決まり悪いのを誤魔化しつつ、今度は慎重にA Rと地図を見比べて――

「ふむ。ただの民家のようなが」

「あれえー!？」

大通りを抜け、赤い屋根の露店を目印に路地を曲がれば、目の前には四階建てのマンションが道をふさいでいた。

入り組んだ古い街並みの通り、電子タグの更新もおろそかになっているようで、行ってみれば閉店や、とっくに移転した後、という店舗が散見された。中には案内用のガイドまで間違っているものもあり、無駄足を繰り返す羽目になった。

「蓮子……」

「ううう……」

「ま、まあ、その気を落とさずに……」

ナズちゃんどころかその肩の子ネズミ君にまで励まされ、もはや私の立場は欠片すら残っていない。数時間前の強気はどいへやら。私はすっかり自信を失って道の片隅に座りこむ。

任せろと買っただ道案内はほぼ役に立たず、ナズちゃんの探し物はずっとも原始的かつ非効率に、あちこちを走りまわり、

目に付いた店を片端から訪ねて回る、実に地味で体力勝負の作業となってしまった。

勿論それらしい手掛かりはゼロ。これまで絶対的な自信を持っていた自分の土地勘を疑わざるを得ないところまで追い込まれていた。

「これで、大体それっぽいところは回った気がするけど……」

徐々に傾き始めたお日様の中、メリーが吐息とともにハンカチで汗をぬぐう。

ととと、と言う小さなエンジン音。

「ん、なんだ、宇佐見にマエリベリイじゃないか」

古めかしいウラル・サイドカーに跨るのは、金髪を左右に括って白い帽子を被った女の子。

線の入ったハーフパンツに緑のカラ、頭の防止も合わせて水兵服にしか(クラシック・アキバスタイルのセーラー服ではなく、文字通りの水兵服だ) 見えない私服をトレードマークにしている彼女こそ、

「北白河――」

「おう、ちゆりちゃんだぜ」

にか、と白い歯を覗かせる。

<Profile>

<Name>北白河ちゆり</Name>

<Age>15</Age>

<Class>比較物理学・岡崎研究室助手</Class>

</Profile>

公開プロフィールに表示される資格はまたいくつか増えている。大学でも有名なひとりである彼女だが、それを示すには

たった一言で済む。つまり、あの岡崎研究室の助手。

彼女がメリーの名前を呼ぶ時にも私の耳にはマエリベリー、としか聞こえないのだが、ちゆりちゃんの発音にメリーが文句を付けた事はない。

「お前らこんな所で何してんだ？」

外見もそうだが、その口調はとて最高学府に居るものとは思えないが、学習カリキュラムの柔軟性とともに入学生年齢の画一化が失われ、強い個性がもてはやされて彼女のような例は増えていた。そもそもそんな事を言い出すと、十二歳入学組の私もメリーも人の事は言えない。

もつとも、彼女は私が入学するよりも以前——岡崎教授がまだ准教授だったころからずっと自称十五歳のまま、もう5年近くもその助手をしているわけで、年齢不詳にも程がある気もする。

「ふうむ」

何か気になるのか、ナズちゃんはオープンされたちゆりちゃんのPANと顔をまじまじと覗き込む。

【どうかしたの？】

言葉にしては聞き辛く、秘匿メッセージを投げてみる。

【……いや、知り合いに似ていた気がするんだが、他人の空似だな】

納得している様子ではないが、それ以上拘るつもりはないらしい。

「ちゆりちゃんは何でここに？」

「こしゅ……教授の手伝いだけ。今すぐ機材が欲しいって我儘いわれてな。今時XT6800とか、何に使うつもりなんだか」

</dictionary>

</item> [XT6800] </item>

<description>一九八七年発売の第三世代パーソナルコンピュータ。販売戦略の齟齬によりシェア占有率は低く留まったものの、OSが公開され、ハード、ソフト両面でユーザーコミュニティ主導による拡張、パッチの配布などが活発に行われた特徴を持つ。以上の経緯により根強い人気を残す。</description>

</dictionary>

世代遅れ——というよりも、もはや骨董品のレベルの、家庭用コンピュータ黎明期の機種である。

「……次の発表、今度はジョン・タイターが出てくるのかしら」  
「教授ならやりかねんな。あんなもんじゃないまどぎジャンク屋にもないから古道具屋頼みだけ。アキハバラまで日帰りで行ってこいと人使い荒すぎると思わないか？」

参った参ったと、ハンドルに身体をもたれさせる。見ればサイドカーには古めかしい電子製品がぎっしりと押し込められていた。

中古を扱うような店であっても、少し気の利いた店なら電子タグ登録してネットスフィアにも広告をうつのが流通の基本だが、既にそこは砂金を攫うように調査済みだ。過去五年遡っても1件もヒットせず、結局ちゆりちゃんは非効率にも足を使つての調査に乗り出していた。

わずかな望みをかけて、寂れ切つた時代に取り残される古道具屋巡りだという。

「つーかね、実のところ海外の好事家と交渉終わってて、来月になれば資材、届くんだけだな。その前にどーしてももう一台欲しいって我儘言われてなあ。参るぜ」

上司の下で割と苦労しているのはどこも同じか。ナズちゃんは何故だか深く共感できるとばかりにうんうん頷いている。

「我らが敬愛する教授様が週開けには上海から戻るから、その前に用意してないとかやされちまうってわけだ。……んで、お前らは？　なんだか見ないかもいるけどな」

「私達も探しものよ。……そうだからゆりちゃん、こういうの知らない？」

先程のナズちゃんの画像を公開メッセージで示す。

「……なんだこりゃ？」

「大事なものなんだそうだけ」

「――美術品ねえ……工芸品って感じじゃないな。東山……違うな、伏見のほうは探してみたか？」

「あんなところにお店あるの？」

「案内残ってるぜ。寺社街は保護条例が厳しいからな、表向きには登録してないところも多いが、骨董好きのじいさんばあさんには意外に立ち寄るもんだ。それに、零番街も近いしな」

大震災からの復興に伴う海外資本の流入は、自己の帰属意識という形で緩やかなナショナルリズムの復権をもたらした。遷都に伴って伏見の西、東九条零番街には旧体制の名残が流れ込み、複雑怪奇な境界と違法に増築の繰り返された治外法権の市街となり、かの九龍城めいた魔窟となっているという。

「……って、」

会話を遮るように呼び出し音。端末を出したちゆりちゃんはげ、と顔をしかめて通信を繋ぐ。たちまちポップする苺模様の赤いウインドウ。

「何だこしゅ――教授。こっちは今探し回って――は？　出町柳の名曲喫茶？」

個人間のメッセージのやり取りなら秘匿回線を使えば良いよ

うな気もするが、ちゆりちゃんはPANを広げたまま公開通信で話し始める。会話の調子から見るとまず間違いなく相手は岡崎教授だろう。流石に会話内容にはセキユリテイが掛っていた。

「なんだってそんな所に……っ！　か教授、いまだこから掛けてきて……ああ、わかったわかった、すぐ行く。了解だぜ」

五月蠅そうに顔をしかめ、端末を耳から離してぼやくちゆりちゃん。こちらに向けて片手だけで詫言を示す。

「と言う訳ですまん宇佐見、マエリベリイ、急用ができた」

「大変ねえ」

サイドカーのエンジンを掛け、器用に車体をターンさせるちゆりちゃん。

またな、と言いつつ残して去ってゆく彼女の背中をしばし見送り、ナズちゃんはぼつりと感想を漏らした。

「なかなか急がしい御仁だね」

「有名人である事に間違いはないわね」

岡崎教授と言えば、世界的にも有名な存在であることは間違いないが、彼女もそれに負けず劣らずの奇人であることに異論はないだろう。

「さて、どうする？　せつかくの手掛かりなんだし、伏見まで回ってみるのもいいかもしれないけど」

「異論はないよ」

「賛成！　でもちよつと休みたいわ」

「それは同感だね」

ナズちゃんのダウジングを疑うつもりはないが、他に選択肢もないし無難だろう。生憎と私達はちゆりちゃんのような足を持っている訳ではない。

「蓮子なら車とか似合いそうだけどね」

「維持費だけでどれだけかかると思ってるのよ。駐車場だって

馬鹿にならないし」

価格自体は昔よりも安価になったが、公共交通が発達したこともあるのと、全盛期の京都のそれをさらに強化したような景観条例のためである。

科学世紀の、特に京都では「行動、進路、速度を一元的に管理されず、運転手の自由意思に依存する動機械」は使用を制限される傾向にある。境界守護の観点なのだろう。

免許は一応持っているが、個人で交通手段を保有しているだけでも年間かなりの税金やあれこれの保証費を課せられることになる。その上普段の生活では使う機会もなかなかない。

そうして得た保障費を元に、公共交通機関であるトラムが整備されている側面もあるので、以前よりもずっと交通は楽になっっているとも言える。

「学生の身分で贅沢なことじゃないかしらねえ」

……などと言いながら東京にいたころは無許可で乗り回していたりしたのだが、その辺の話は今関係ないので記憶の底に沈めておいた。

そんなことを説明しながら、路地を出た時だった。

どおん、と大きな太鼓の音が耳を震わせる。

電子加工されていない、原始的な轟音——生の楽器の音。

開けた視界の先、丸太町の通りには異郷が広がっていた。

色鮮やかな衣装をすっぼりと纏い、厚底の靴を履いて、色とりどりの髪に安全ピンやらをこてこてとくっつけ、仮面をかぶった奇妙奇天烈な格好の一団が、ぞろぞろと街を練り歩いて道を塞いでゆく。鼓笛に太鼓に、鈴に銅鑼まで打ち鳴らし、聞いたこともない響きの歌を叫びながら歩いてゆく。

「東西、東西!!」

じゃあんと銅鑼が打ち鳴らされる。生の楽器が奏でる轟音

に、人々の眼は否が応にも惹き付けられてしまふ。右へ、左へ、斜めに踏みだし後ろに下がるその歩き方は、古い時代の道術の歩法を模したものだ。

「凱旋せよ、凱旋せよ! いざや進めや、我ら天狗の大躍進! 鞍馬の北より降り来て、舞えや舞え京の空に!! 此度は百と八十年ぶりの大回帰なるぞ!!」

黒い面を付けた先頭の男(声でそうだと知れた)が、朗々と歌い上げるように口上を述べる。わあわあとそれに追従する異形の一団。

「東西、東西!!」

「東西、東西!!」

「凱旋せよ! 凱旋せよ! 鞍馬の山より凱旋せよ!」

ナズちゃんがフードの上から耳を押さえ顔をしかめていた。

「なんだい、この馬鹿騒ぎは」

「……無秩序で無軌道な若者の青春の暴走、ね」

</dictionary>

<item> 【天狗党】 </item>

<description> A R 対応を拒否し、あるいは後天的に処置を無効化(※1)してまで人間の多数への帰属を否定する若者たちの総称。なにもでもない特別な存在の自分を叫ぶことをその主張とする。本拠地は京都、大阪、東京など。

(※1) A R 処置を自主的に拒否することは違法ではないが、一般にはあらゆる恩恵を拒否することで社会制度からの逸脱に繋がるため、倫理にもとる行為とされる。

</description>

</dictionary>

これがさらに汎一化された人類社会への継承者として神格化された妖怪を信奉するオカルトサークルと結びついて生まれたのが彼ら、鞍馬会である。

彼らの主張は不可思議な現象が起きた時それを、世界から消えかけている幻想、妖怪の警鐘であるとするとするもので、境界暴きが違法化された原因の一端でもある。複数の大学オカルトサークルも関係を持ち、協力状態にある者も多い。

「ヴァーチャルへの傾倒を忌避してリアルへの回帰を叫ぶ文化は東京じゃ珍しくもないけど、こっちだと絶対数が圧倒的に少ないから——その分主張も先鋭化してるのよね」

道を封鎖して、特に全天候管理社会の象徴である ترامムや AR の中継点のボックスを占拠したりもあるため、社会問題となり、今では立派な危険思想団体として当局からもそれなりに目を付けられている。

もつとも多くの場合、中核メンバーを覗いた大半の連中はこうやって自己主張激しい格好をして氣勢を上げ街を練り歩き、たまに喧嘩沙汰を起こしたりする程度であるのだけでも。

特にこうした街中での行列は、参加者にごくごく普通の学生が混じっている事も多く、その多くが AR を無効化して活動するため、取り締まりもなかなか進んでいない。

「しかし参ったわね。これじゃ ترامム も使えないわ」

「迷惑ねえ。オカルト活動は結構だけど、もつとひっそりやってもらえないかしら」

諦めと共に、一つ先の乗車場へと道を迂回しようとした時だ。

「おや」  
最初に空を見上げたのはナズちゃんだった。手のひらを上に向け、ぼつりと告げる。

「……雨か」

確認するよりも早く、地面に雫が染みを作りはじめた。肩にいた子ネズミが慌ててナズちゃんの胸元に潜り込む。

降り注ぐ雫は、あつという間にその数と勢いを増し、切れ間なく叩き付けるような豪雨となった。舗装された地面の上を強く叩く雫が、勢いよく辺りを跳ねる。

あまりにも突然に崩れだした空模様、滝のような雨が注ぐ。露店を広げていた老人や観光客の呼び込みをしていた人々が店の軒下へと避難していった。

【雨!!】

【ちよつと待てよ聞いてないぞ!!】

【やばい、荷物が濡れる!!】

公開通信に、天気関連のツイートが爆発するように膨らんだ。叩き付ける雨に AR の仮想ウィンドウも押し流されそうに震え、ぱりんぱりと割れ砕ける。

同時に鞍馬会の行列は歓喜の叫びを上げ、狂ったように楽器をかき鳴らした。雨で視界がきかない中、道を塞ぐ彼等のせいで喧騒はさらに増してゆく。

「照覧あれ! これぞまさに大回帰の証なるぞ!」

「凱旋せよ! 凱旋せよ! 鞍馬の山より凱旋せよ!」

「凱旋せよ! 凱旋せよ! 鞍馬の山より凱旋せよ!」

街はちよつとした混乱に陥っていた。

たかが雨くらいで、と言うなかれ。京都において、天候はすでに自然の範疇のものではない。全天候管理型の京都に置いて、予測されない天候というものは存在しないのだ。マクロカオス理論の発展とともに天気予報は天気予定とも呼べるべきまでに確実化し、区画単位の温湿度変化までほぼ把握されている。

さらに京都では過去の大災害の教訓から天候制御の技術も試

験導入されており、一昨年から稼働中だ。台風や季節外れの豪雪を緩和し、未然に防ぐことを目的としているこれらの技術により、雨や晴れはあらかじめ指定された時間で振り、事前の予定を外れる事はまずないのだ。

「ひああ……」

「メリー、大丈夫？」

というわけで、雨は文字通りの寝耳に水。大急ぎで非難したにもかかわらず、ブラウスは肩まで水浸しだった。下着のラインまで覗きそうになっているメリーにタオルを受け取り、布地に押し当てて水気を減らす。

あつという間に人通りの少なくなった（一部連中を覗いて）通りの端、お店の軒差を借りて空を見上げる。

「今時京都で濡れ鼠なんて……」

「——ふむ。なかなか難儀なものだね」

ナズちゃんと言えば、用意周到に取り出した雨傘を広げ、雨を凌ぎながら地面の水たまりを避け、ゆっくりとこちらに歩いてきた。

京都の天候については事情をARで確認したか、ナズちゃんは顔いてパークカーのフードを目深にかぶり直し、髪についた雫を払いのけた。

「この街も、良いことばかりではないということかな」

「反論できないわ」

こちらの生活に慣れ切った私からは、用心のためにいちいち傘を持ち歩く習慣という習慣は抜け落ちていた。そもそも京都で傘を持つていない人間が少なくないくらいであり、上京の時に持ち込んだ折りたたみ傘も、旅行の時でもなければすっかりクロゼットの奥で埃を被っている。

一方で、先程にもましてやかましいのは、鞍馬会の連中であ

る。天気雨、狐の嫁入り。まさにこれこそ妖怪の顕現であり天狗の警鐘だと歓喜に沸き立ち、手がつけられないレベルでハッスルをはじめていた。

「照覧あれ！ 照覧あれよ皆々様方！ これぞ百と八十年を過ぎ、此度の大回帰の予兆である！ 京の空は我らのものぞ！！

いざ、凱旋せよ！ 凱旋せよ！ 鞍馬の山より凱旋せよ！！」

「凱旋せよ！ 凱旋せよ！ 鞍馬の山より凱旋せよ！！」

「東西、東西！！」

「東西、東西！！」

もはや通りの混乱は極致を極め、收拾は付きそうにない。今すぐ警察が駆けつけても、鎮まるまでには相当の時間を要するだろう。

予定外の豪雨とこの混乱でトラムが一時的に閉鎖され、動きが取れなくなったことが公開通信のツイートに流れてきた。

「天候制御のコントロールミス？ そんな事あるものなのかしら……」

見たこともないような原因だ。これまで京都の制御を司るシステムに異常が発生したことなど一度も記憶にない。絶対にあるには確かだろう。

一向に弱まりそうにない雨足を見上げ、私は溜息をついた。

結局。あのまま二時間が過ぎてても雨足の衰える様子はなく、私達は今日の探索を諦めて先斗町へと場所を移していた。

ちゆりちゃんに教わった伏見の骨董屋街は、神社前という立地もあって、午後五時も過ぎればほとんどが店を閉めてしまふ。まさか一軒一軒扉を叩いて回る訳にも行かず、なし崩し的に今日の活動は打ち切りとなったのであった。

「まだ止まないわねえ」

窓の外に吹き付ける雨雫を眺め、メリーが吐息。特に雨は左京区で強いようで、なかなか弱まる様子もない。

鴨川と高瀬川の流れに挟まれた一角、華やかな明かりが真夜中まで灯り続ける飲み屋街の喧騒も、降り続く雨のせいどころかぼんやりと霞んでいる。

既に入店して三時間近く過ぎており、そろそろ店を出るか、少なくとも河岸を変えるくらいの事はしないとイケない。

窓の外には無数の違法スパムがポップを繰り返していた。こうした不法タグは治安の悪さに比例しており、零番街付近に比べればまだましだが、ここいらも決して安全清潔と言う訳ではないのである。

「気にしなくてもいいよ、どうせこの雨じゃあお客も来ないだろうし」

カウンターのポップを磨くマスターが苦笑する。

誰もいないよりは、定期的にグラスを重ねる私達がいる方がまだましと言うことだろう。実際、ここを出てもあまり行き先が当てもない。

こう言うとき多くの人々に怪訝な顔をされるのだが、ウワバミの集まる先斗町でも、秘封倶楽部行きつけの店はさして多くはない。入学半年で京都の飲み屋街をほぼ網羅した私としても非常に不本意なのだが、要するにメリーと私が酔っ払って延々と

話し込んでいる場合、我々にとつて、居心地のいい店というのはどうしても限られてくる。

ここ『レトロ左』はその少ない例外の一つ。前世紀の映画に出てくるような内装の、レトロなバーで、映画から抜け出してきたようなマスターが独りで経営している。採算が取れていると言いはし難く、客も滅多にいないことがほとんどだ。だからこそ私達が常連になってもさほど迷惑を被っていないとも言える。

なお、マスター本人もこういうのに憧れていて、敢えて意識しているらしいとのこと。

実際、マスターの趣味と実益を兼ね備えた（実益に関しては本当に備えているのかは議論の余地があるかもしれないが）だけあってそのキャラ作りは徹底しており、お酒に関する蘊蓄は他の追随を許さない。問題は我々の方にそのあたりへの興味がそんなに無いということだろうか。

いや、決してマスターの努力をないがしろにしてるわけはなく、学生の身分としてはさほど高額ではない価格で美味しいお酒が飲めればそれで十分なのであって。

電子化がスタンダードの科学世紀であるからこそ、AR処理からフリーな酒も好まれる。カクテルにまで成分表とそれにまつわる健康被害、年齢確認や飲用することに對する弊害を表記され、いちいちそれらに承諾のサインをしない限り飲めないというシステムにはいろいろと辟易している。マスターが個別にそれらを確認し、認証してくれるというシステムは色々心地よかった。

「どうなってるのかしらね。異常気象なんてもうとつづくに死語になつてると思ってたけど」

答えつつ端末を弄るが、急な天候の変化は、交通機関への乱れとして確かにニュースの時事欄をにぎわしてはいたが、その

原因まで深く追求している記事は見当たらなかった。

「知った事か、そんなの！」

ナズちゃんは5杯めのカクテルを空け、空のグラスをだんとテーブルに置く。

「まったく！ だいたい、いつも勝手なんだよ！ 人に相談もせずに全部一人で決めて、人がどれだけ苦労していると思っているのかね！ あのバカトラは！ 一度私の苦労も思い知ればいいんだ!! おかわりだ!!」

ARグラス越しにもわかる、完全に据わった目の赤ら顔。ナズちゃんはお酒は嫌いではないらしいが、あまりアルコールに強いとは言えないらしい。それでも一杯、二杯と飲み進めるうち、いつしか何かのタガが外れたように度数の高いグラスをばかばかと開けていた。

「マスター、聞こえなかったかい、おかわりだ！」

商売人らしくもなく、そろそろやめときなというマスターの心遣いも吹き飛ばささんばかりに、ナズちゃんはあると牙をむく。止めるべき役目を背負った子ネズミ君も、揮発したアルコールですっかり酔っぱらっていた。

「凄いだトラねえ」

飲んでるアルコールの成分量だけなら我々のほうが全然上なのだが、出来上がった酔っ払いは一匹だけである。

「トラは私じゃない、あっちのほうだ!!」

どうも言葉の端々にのぼるトラ、というのがナズちゃんの上司のことらしいが、愛称なのか何なのか。

「大変そうだねえ」

マスターがナズちゃんの前のグラスを交換する。まるで自分のことのように心配してくれているが、そもそも彼は路頭に迷った女の子を身の上も聞かずに給仕に採用したりしてしまう人

なので、根が善人なんだろうと思う。

「本当に人の気も知らないで……!! こんな遠くまで駆け回る羽目になって、しかも見知らぬ人たちにまでこんなに迷惑をかけてだ!! ただの役目で尽くしてるとでも思ってるのか、あの馬鹿トラ!! ——こんなもの、惚れた弱みでなきややつてられないだろう、決まってるじゃないか!!」

【わーお】

思わずメリーと顔を見合わせる。

突然転がりだした告白に、見て見ぬ振りをすべきだという理性と、ちよつとそこんとこ詳しく、という興味が葛藤を始める。上司と部下の禁断のオフイスラブ——というには少々年齢が違いう気もするけれど。それとも教師と教え子だろうか？

「本気……人の……ごしゅ……」

結局、新しいグラスを半分も空けないうちにナズちゃんはテーブルに突っ伏して寝息を立て始めた。僅かに目元が赤い気がするのは、乙女として見ないふりをしておくべきか。寝息を立て始めたナズちゃんに、マスターが近づいて様子を見る。

医療触媒があれば、過剰なアルコールはすぐに分解されて無害になるが、おそらくナズちゃんにはそれが無いだろう。幸いにして、彼女は酔い潰れたというよりも、張り詰めていた気が緩んだだけだった。

「蓮子ちゃん達、どうするの？」

「そうねえ」

空は見えないので端末を引き出して確認。時刻はそろそろ十一時を回る。普段ならもう一軒くらい回つても良い時間だけれど、この雨だ、マスターとしては今日はもう店仕舞いにしたい気分だろう。個人的にはまだ少々飲み足りないが、このまま二人で再度乾杯、というのはちよつと気が引ける。メリーも同感のよ

うだった

「ねえ、蓮子。明日も宝探し、付き合うのよね？」

「まあね。ここで見捨ててさよならってのは、ちよつと、これを見ちやうとねえ」

わずかに目を濡らし、寝息を立てているナズちゃんを見て、吐息。すっかり絆されているのは私も同じだった。

しかしそうなると問題になるのは今日の寝床だ。

ナズちゃんは見たところ泊まるところを用意しているようにも思えず、それらの事を聞きだすには酔っ払いはあまりあてにならない。

まさか朝までここに居座る訳にも行かないだろう。マスターならそれくらいの事を言い出しかねないが、せっかくのお気に入り居心地のいい店であるからこそ、あまり迷惑をかけたくない。早々にお勘定をすませて店を出ることにした。

「……気をつけてね」

引き留めようとするマスターにお礼を言っ、借りたお店の傘を広げる。そろそろカードの限度額が怪しくなってきたので、メリーに少し奢ってもらったのは「愛敬」。

「今夜は私のところで引き取るわ。後で説明しておく。ほっぽりだしておく訳にも行かないし、一応、酔いつぶしちやったわけだしね」

「もう一人寝るところあるの？ 蓮子の部屋」

「五月蠅いわね」

一応、これでも自覚はあるのだ。

と。

「ん？」  
ARが着信を告げる。思考トリガで反応するのは、ネットスフィアにアイコンを活性化させたちゆりちゃんからの秘匿通信。

同時に、いくつか着信があったことと、ちゆりちゃんからツイートクラウドも公開通信にポップする。

端末を起動し、ARと接続。雨のせいかやや接続が悪い。ポップする仮想ウィンドウはわずかにノイズが混じっていた。

【どうしたの？】

【ああ、やっと繋がった。何か知らんがやけに通信が悪いな】

【ちよつと飲んだのよ】

飲み屋街などでは、意図的に外部との通信を繋がりにくくしている場所がある。マスターがそうしているというのは聞いたことがなかったが、あり得ない話ではない。

【宇佐見、マエリベリイ、お前ら暇だろ？ どうせこの雨じゃのんびりできてないんだろ、研究室で呑み直そうぜ】

【……はい？】

メリーにもPANの通じて通信の共有を許可。一緒に会話に加わる。

【いやな、さっきまで駆け回ってたんだが、気付いたらこんな時間だろ？ この天気じゃどこも早じまいだろうし、お前らも飲み足りないんじゃないかと思ってな。どうせ払いは教授だから、適当に見繕ってきてくれればタダ酒だぜ？】

【……本音はそれか】

バレたか、と舌を出すちゆりちゃん。

【うーん……正直、少し飲み足りないけど】

【行くの？】

メリーさんは少し不満そうだった。私と同じ一人暮らしながら割と貞淑な彼女、無断で（誰にだろうか）外泊は持ったの他などと思っている模様。

気が向いたらいいさ、と控えめな迫伸を残して、ちゆりちゃんからの会話は切れた。残された私とメリーは顔を見合わせ

る。

「どうする？　なんとなくだけど、このままじゃ物足りない気がするのよね」

「呆れたわね」

「いいのよ？　別に無理して付き合ってくれなくても」

「そう言ういい方するの、ずるいと思うわ。蓮子」

■■■■Friday, November 4, 2065 at 23:17▶

かくして。

大幅に遅れを出しながらもようやく運転再開したトラムと地下鉄を乗り継ぎ、やってきました衣笠山の麓。我々が私立鹿鳴館大学。

岡崎教授の研究室は普段出入りしているキャンパスとは2ブロックほど離れた旧校舎に、ひっそりと佇んでいる。

「よ」

一階で、ちょうどいま戻ってきたらしいちゆりちゃんと出くわした。この雨の中ついさっきまでサイドカーで駆けまわっていたらしく、全身ずぶ濡れの身体をタオルで拭いていた。

雨具も付けずにご苦労な——と言いたいところだけれど、どういう訳かむしるずぶ濡れの割にかえて元気になっているように見える。

「じゃ、行くか」

大きな荷物をひょいと担ぎあげたちゆりちゃんに連れ立って、

階段を昇る。もちろんエレベーターなんて気の利いたものは動いていない。設備は解体され、良く用途のわからないアンテナがずらっと、望郷の宇宙人のように天を向いて手を広げていた。一説では教授が個人で打ち上げた衛星とやり取りする通信域を確保するためのものだというのが、真偽は定かではない。

利用者も少ない（ごく一部のサークルが部室を持っていたりするが）この校舎は、三階から上はほとんどが岡崎研究室の機材が占領している。一見して何が何だか分からないガラクタだが、説明を聞いてもやっぱり訳のわからないガラクタばかりだ。「よしゆ……こほん。教授……」

三階廊下の突き当たりに、分厚いドアが偉容を放っていた。悪趣味な文字でドアの上に記されるのは、

【この門を潜るもの、一切の望みを捨ててはならぬ】

ぎいと手動でドアを押しあげれば、記録媒体の駆動音とリアクターの唸り声。知つてはいたけど酷い散らかりようだ。岡崎研究室は魔窟と渾名されるがそれは比喩でもなんでもなく、文字通り踏み入る事を躊躇わせるほどの雑多なガラクタの山のせいだ。

<dictionary>

<item> 【岡崎夢美】 </item>

<description>比較物理学。K大名誉教授、のち私立鹿鳴館大学岡崎研究室。弱冠15歳で首都の最高学府の教授職に付いた才媛。学閥には属さず、在野の研究者とも交流を持つこともなく独自のスタンスで研究を続ける。

</description>

</dictionary>

一般には孤高を愛すると解釈されているが、実際はちよつとその個性が強すぎて、誰も追従できないと言うのが正しい。先年、園山朱音を欠いたER3システムがかの世界最高の頭脳【七愚人】の後継に招聘したなどと言う荒唐無稽な噂が、まことにやかに語られた。

比較物理畑の出身だが、すでに大統一理論すら解明したと豪語し、その完全性を破る例外の力、魔法にすら言及して物議を醸した。非統一魔法世界論は現在のところ、彼女とその助手だけが支持するトンデモ学派である。

どういふこだわりか、ひたすらに赤一色を好む。学内はおろか公式発表の場でも、とても正気の沙汰とは思えない赤のローブとマントを羽織り、平然とした顔をしている。彼女にとっての個性はそのまま彼女にとっての常識なのだとも。好物は苺。

助手一人と世界各地を飛び回って研究に勤しむ彼女、その変人ぶり学会からもそっぽを向かれていながら、教授職をクビになることもなく、どの勢力に属する事もない奔放さで研究の場に居続けている。海外には彼女の熱心な信奉者もいるらしい。

もともと学内で煙たがられていないわけではなく、研究室は敷地の隅のへき地、旧館の端へと追いやられている。空調も壊れがち。学内の反発であらう。

そんなものめげる教授でもなく、今日も平常運転だ。

「教授ー、いねーのかー?」

「んあー」

やる気のない返事とともに、積み上げられた論文メディアの山の陰から、ほこほこ湯気を立ち上らせる赤い頭が覗く。ご丁寧にバスローブも真っ赤だった。

「さっきこち戻ってきたばっかりなのよ。面倒だからそのまま徹夜でね。今シャワー浴びてきたところ」

ある意味で大変貴重な気がする岡崎夢美教授の風呂上がり。一部の男子学生には垂涎のシチュエーションかもしれない。

「またなんかやらかしたのかよ」

「失敬な。ちゃんと仕事よ。直に緊急の呼び出し食ってヤクモクラウドのエラー対応で狩りだされて死にそうになったんだか?.....」

</dictionary>

<item> 【ヤクモクラウド】 </item>

<description>八雲立つ(妻囲み)——須賀宮建国を語源にする、京都の守護結界プログラムの総称。リソースの主は多重構造結界《八重垣》の維持に用いられるが、霊脈調整や衛星軌道計算他、全主天候制御も担当している。モジュールの大半がクラウドサーバー上の仮想エミュレータに存在するという、極めて特殊な管理をされている。

</description>  
</dictionary>

げんなりした表情で告げる間にも、教授のものには次々とメルがポップする。教授の城たるこの研究室には意に沿わない部外者は電子的にも物理的にも締め出されるようになっていらいが、それを掻い潜ってくるとならから、相手も相当のものなのだろうか。

「は? それ本気で言ってるの? 悪いけど今日はバス。さっき戻って来たばかりなのよ? .....ああもう、埒が明かないわね、わかったわかった。あとでそっち行くから」

何をぬかしてるのかしらね玖渚の奴、と愚痴をこぼしつつ通話を切る。

ちゆりちゃんがいつも公開通信で会話をするのは教授ゆずりらしい。そう言えば教授の出身地は京都ではなかったはずだ。

「……はあ。で、その子は？」

「今日知り合った子なんだけど——」

寝息を立てるナズちゃんを借りたソファに横たえつつ、今日会ったことの一通りを教授に説明した。

「で、ちよつと飲み直そうって話になってな」

「なるほど。良きかな、こういう無茶ができるのも学徒のうちだけね。謳歌したまえ学生諸君」

「教授が言うなよ。永遠の学生気分にくせに」

「あつはつは」

私達とそう変わらないはずの教授は屈託なく笑う。

ちゆりちゃん、私、メリー、そして教授で、途中のコンビニで仕入れた缶チューハイなどを手に手に突き上げる。

「二」乾杯「二二」

さつきまで呑んでいたものの十分の一近い安さだが、アルコールに貴賤はないのだ。

「くーっ、染みるねえ！」

たちまち三五〇mlを空っぽにし、ちゆりちゃんは空いた缶を机の上に叩きつける。

「んで教授、さつきから何やってんだ」

「二ニュース見てないの？ 今日、天候制御モジュールのエラー。あれの後始末よ」

真偽も定かではない風説の類と思っていたが、どうやら本当の事らしい。当初、システムバグと疑われたエラーは原因が特定できず、現在外部からの人為的なハッキングまで視野に入れ

て警戒レベルを上げて全モジュールの総チェック中だという。

良くそんな情報を知っているものだ。流石教授。

「……と思いきや。」

「おいおい、また覗き見かよ」

「法は市民の安全と財産を守るためにあるものよ。ながら食事で死者が続出したら食事制限法ができたんだし。史上最悪の悪法って非難轟々だけだよ」

つまりね、と教授は指を立て、

「生命も財産も失う覚悟完了の私なら法に従ういわれもないってことよ」

「おいおい」

苦笑と共に、ちゆりちゃんはくしゃりと缶を潰す。その隣で桃の果実酒をこくこくと飲んでいたメリーが、ふと顔を上げた。

「……ねえ、もしかして今日私達が迷ったのってそのせいじゃないの？」

「え？」

「ARの異状よ。ナズちゃん是不案内だから分かるけど、普通に考えて私達まで道に迷うなんてありえないじゃない」

「……そりやそうだけど」

昨日今日、京都で暮らし始めたわけではないのだ。いくらなんでも、地図片手にいつまで経っても目的地に辿りつけないのはおかしい。アルコールの入った頭でもそれは論理的に思えた。「でも、目に見える光景と、地図が、同じように間違ってたら？行き止まりをそうでないと見せかけたり、曲がり角を増やしたりすれば、あるはずの道を見せかけないように見せかける処理くらいは可能じゃないかしら」

いくら来たことのない道だって、いちいち壁に触れながら突き当たりに隠し扉があるかなんて確かめることはしない。扉や

建物の壁が見えていれば、そこに入る事はないはずだ。

「でも、そんなこと——」

「在りうるかもだぜ。可能性の話だけだな」

A RはあくまでA R、『拡張』現実だ。ヴァーチャルなものではない。五感に関与する事などできず、別の現実を体験させるには遠く及ばない。

けれど、二次元に描いた絵が三次元に見えるように。限られたリソースでも、錯視や光源の組み合わせで、それらしいものを作ることは不可能ではないという。

「……教授、そんなこと出来るものなの？」

「可能ね。……相当のリソースは要求されるでしょうけど、ヤクモクラウドはそれを可能にするだけの拡張性と処理能力を見越して設計されてるわ」

A Rにおいて電子タグに関連付けられた情報は、その重要度、専門性に応じてカテゴリ・クラス分けされる。どんな情報も等価に扱っていは限られたリソースが死んでしまうし、何より身内の訃報と昨日出たばかりの新作スイーツの情報が等価では不便極まりない。スパムフィルタなどはこの情報の重みや特性を判別して、不要なものを除外するものである。

もともと自動ポップするタグ情報は慣れないときはとことん慣れないもので、A R情報に惑わされることを嫌うものはA Rを自閉モードや不活性化させるなどして対応する。しかし仮に電腦を不活性化させていても、OFFにしている訳ではなくサスペンド状態なので、生命や安全にかかわる重要情報はそれらに優先して表示されるのだ。では、その時に実際とは違う地図と壁や曲がり角のA Rが、視界に表示されれば？

「隠し通路にあり得ない行き止まり。京都市街の拡張現実迷路の完成ってわけだ」

「それ、かなり有用な情報よ。……そうね、確かに疑似二次元の情報を、閲覧者の状態や座標に応じてリアルタイムで描画するなんて無茶をしたなら、モジュールに処理限界が来るのもあり得る話だわ。そもそもあのモジュールが真つ当な外部介入くらいで負荷を感じるはずがないのよ。」

スパム広告に、何らかの方法で人命にかかわる緊急警告と同格の重みづけをすれば、不活性の電腦でも強制的に割り込まれる……」

【るーこと！ 現在の処理を全て中断！ クラウドの処理タスクを一から洗い直して！ WebCam の利用履歴も全部！】

【はい！】

古式ゆかしきクラシカル・アキバスタイル・メイドの格好をした電腦仮想人格がアバターがポップ。かわいらしい返事を返してとてとてと処理を開始する。のんびりとした動作の彼女だが、その実はサーバーに棲む高度知性AIである。すぐに情報は集まってきた。

「盲点だったわ。A Rを日常の感覚としている人間には、そこにスパム広告が実在しているのに等しい。タグ情報の重みづけはタグ自体の固有情報ではなく、タグのデータをネットワークスフィア上のヤクモクラウドが管理してるもの。タグのデータに情報を紐付けしている。この管理が無茶苦茶になり、さらに情報の重みづけが最優先にされた場合、A R処置をされ人間にはそれが強制的に視界に割り込むことになる……！」

何がしかを掴んだらしい教授、独りで呟きながら、マルチタスクで何事かの処理を始めてしまう。

「……教授、飲まないのか？」

「それどころじゃな——」

教授の言葉を遮るように。ずん、と轟音が京都を揺るがした。

視界がぶれ、一瞬前後も怪しくなるような感覚。衝撃よりもその違和感に、思わず目を擦る。

「——なんだッ!？」

いち早く動いたのはちゆりちゃんだった。ソファを蹴立って立ち上がり、手近な窓へと走り寄る

「なに、あれ」

メリーの掠れた声が、悄然と漏れた。

吹き込む雨風にも構わずちゆりちゃんが研究室の窓を押し開く。生温い風が水滴を伴って室内に吹き込み、散らかり放題の紙媒体を吹き飛ばす。

歴史深き古都、京都の街は平坦だ。時代とともに厳しさを増す景観条例によって高層建築の建造は禁じられ、大学の四階からでも、遠くを見通すことは容易い。

その升目のような街並みの一角に、あり得ない光景が広がっていた。

きらびやかに立ち上がる朱屋根の瓦。照らし出される流麗な細工。

東——京都御所のあるはずの森の中に、あるはずのない大伽藍が浮かび上がっていた。

「……………」

全員が言葉を見失っていた。

空には渦巻く黒雲が立ち込め、うねりを上げて吹き荒れ、そこから漏れだす閃光が夜闇を裂いて煌めく。お腹の底に響くような重低音で、どろどろと稲妻が唸りを上げていた。

その屋根の上、黒い渦の中心に潜む、得体のしれない影一つ。

「!!」

姿も、形ですら明瞭ではない何か。四つ足で瓦を踏み締めた怪物は、甲高い声で喉を震わせた。

空に湧き起こる黒雲から、轟音とともに閃光が迸る。

落雷の衝撃とともに、A Rに強烈なノイズが走った。ぱりぱりと音を立て、意味不明の文字を並べたスパムウィンドウが次々に浮き上がっては割れ砕けてゆく。

「A Rが……?」

とつさにフィルタを外せば、市街の混乱を伝える無数のツイートクラウドが、爆発的な勢いで拡散を始めていた。

【なんだ今の音!!】【御所のほうで騒ぎとか——】【詳細希望!!】  
【当方K大にて立ち往生中!】【トラムの再開まだー?】【緊急・空に怪物】【降水確率が異常値】【A Rが動かない】【公開通信混雑しすぎ】【詳細希望】【四条通の昼間の件】

もはや誰の目にも明らかなる異状事態。余りの事に息を飲んでいた私達の中、早々と立ち直ったのはやはりこの人、岡崎夢美。

【るーこと!!】

【はあい】

ポップしたアバターの電子音声で暢気な返事を返す。管理者権限を付与された人工知能は、鮮やかな高速処理で今京都に起きている異状事態の情報を集めてくる。その結果は——

「天候制御モジュールに異常……?」

ヤクモクラウドのうち、全天天候制御を行うプログラムが、制御不能とも言える状態になっているという事実。

再び天を割いた稲光が、京都の中央を打ち据える。立て続けの轟音が大気を揺らし、赤枠で彩られた緊急メッセージが視界にオーバーレイして跳ね上がる。やかましい警告音を撒き散らす

ウインドウは、京都市民の安全を訴え、外出を控えるように叫んでいた。

「そんな事起きるもんなのか？」

「理論上はね。そもそも人工降雨技術程度なら半世紀前に完成してる。落雷も暴風もその副次効果よ。——それにしちゃ高度に制御され過ぎてる気はするけど」

「何の騒ぎだい……」

ソファからずり落ちたナズちゃんも目を覚ましていた。まだ酔いが抜けきっていないのだろう、顔に張り付いたタオルを払いのけ、ぼんやりとした顔で体を起こす。

「むぎゅっ」

と、ソファをつかみ損ねて彼女はそのまま床に倒れこんだ。思い切り顔から床にぶつかった鼻をさすりながら、涙ぐむ

「ナズちゃん、平気？」

「痛たた……ん……な、なんとか、ね。お陰で酔いもさめた」  
衝撃で知性眼鏡も吹き飛び、ナズちゃんは、やれやれとつぶやきながらそれを拾おうと身がかがめ——

「あああああああ!？」

驚愕の聲が研究室を塗りつぶした。馬鹿でかい音量にただでさえ不安定なARがさらにノイズを走らせる。

「今度は何!!」

「こ、これ……こんな処に!!」

ナズちゃんが指差しているのはメリーの鞆から転がった筈だった。まだ泥のついた筈を拾い上げ、ARグラスを半分ずらして交互に覗きこむ。

「なんてことだ……」

筈を握りしめ、わなわなと震えだすナズちゃん。目には悔恨の涙まで滲んでいた。

「ちよっと待て」

身を乗り出してきたちゆりちゃんがポケットから目薬を取り出した。医療触媒で生成した生器官高分子を洗い流すもので、ARに不具合が生じたときに用いられる治療用具だ。

「……そういうことか。見てみな宇佐見」

茫然と呻く彼女が差し出した目薬を受けとって、私もそれに倣った。

そこにあっただのは、小さな八方屋根の仏塔。

ナズちゃんの握りしめる筈は、まさに彼女が探し続けていた聖遺物の姿を取り戻していた。

</dictionary>

<item> 【国宝・兜跋毘沙門天像の宝塔】 </item>

<description> 京都市教王護国寺、国宝・兜跋毘沙門

天像が左手に持っている宝塔。木製、高さ十五センチ。

一九六八年九月、開催中の「東寺秋の秘法展」に出品中に盗難に遭い、以来所在が不明である。 </description>

</dictionary>

「どうしてこれがこんな場所に——」

「あ……メリー?」

「ええと」

思わず目を見合わせる。メリーが夢の中で知らない場所へと現れ、何かを持ち帰ってしまうのは、良くあることだ。

そこに再び、強烈な閃光。

轟いた落雷に合わせ、さらに変化は起きた。

【天狗じゃ! 天狗の仕業じゃ!!】

レトロな古新聞を模したようなメッセージが、強引に割り込

んできた。排除しようにも優先レベルが高すぎて、フィルタを素通りして次々にポップする。

【御山にて御一新以来の大会議!! 見えた四天王の帰還に議論踊る!!】

【大天狗総選挙迫る!! 犬走、姫海棠両派の動向やいかに!?】

【雲海の中に巨人の影!! 河童の新技術か!?】

【竜神様の出現!! 百八十年目の大回帰不可避か!?】

【紅魔条約締結、月領を割譲と発表、その真意は!?】

雨交じりの風の中、荒唐無稽を飾り立て、煽りたてるような記事が視界を埋めた。

雷光に照らされ、遠く京都の市街が鮮やかに艶やかに姿を変えてゆく。きらびやかな朱と金銀に塗られ、立ち上がる見たこともない街並み。そしてそこを練り歩く人ではない物たちの喧騒。

鬼がいた。天狗がいた。河童がいた。

狐がいた。狸がいた。猫がいた。

妖精たちが駆け回り、吸血鬼が魔女とともに空を飛ぶ。

ARの異状。何者かに書き換えられたオーバーレイヤーの幻想。けれどそこはもはや、幻想の国だった。

■ Saturday, November 5, 2065 at 01:36 ◆

天に稲光が響くたび、京都には異界が広がってゆく。

さざめく光、揺れる街並み。

燈籠に灯る燃える炎。鮮やかな赤。見上げるような鐘楼があんがんと鳴り響き、艶やかな色合いに塗られた町に、ざわめく声が聞こえる。そこを歩くのは、異形の人混み。

見た事もない賑々しい、妖怪達の都へと、京都の街が変貌してゆく。

跋扈する天狗党の大行列。面を被り踊り練り歩く彼等は、ARの暴走で本当に妖怪達のように姿を変える。

無数の燈籠に導かれて化け猫たちが進み、地を割って神々しい光を放つ宝船が浮上し、伏見の鳥居の向こうから狐が踊り、淡路より上陸した狸と合戦を始める。鬼火が灯り

北の鞍馬山からは修験者姿の天狗の一団が高下駄鳴らして行進し、御一新を知らせる札を撒き散らしながら次々と街に舞い降りてゆく。闇の中揺れる鴨川は洪水の時のように水量を増し、そこから岸には次々と河童が這い上がり、河原で馬鹿騒ぎを始めていた。野辺の化野からは死霊に亡霊たちの群れが湧きだした。額の札を揺らして陽気に跳ねるキョーンシーを筆頭に、土盛り墓の墓を崩し、骨の身体をカラカラと鳴らして陽気に練り歩く。四条通、新京極には外来の吸血鬼に魔女に悪魔がワイン片手にハロウィンパーティーをはじめジャックランタンの笑い声がこだまする。

遠く北東の大江山から地響きを立てて鬼達が進軍し、担いだ酒樽を通りに並べて酒盛りを始め、糺の森からは式紙たちが群れて空に舞い上がる。

龍安寺の竹林の道から、兎達の担いだ輿に乗って優雅な十二単を纏う姫君が姿を見せ、空を荘厳なる焰を纏った鳳凰が羽はたく。

まさに神と魔の百鬼夜行。それを率いるものこそが、正体も

定かではない怪物だ。

どこにこんな数が潜んでいたのだろう。鞍馬会の行列が、そこかしこから現れて徒党を組み、派手な衣装に身を包み、太鼓を銅鑼を鼓笛を鳴り響かせ、雨の中をもともせず練り歩く。

「東西、東西!!」  
「東西、東西!!」

<anonymus>

【匿名】プライバシーの保護のため、映像を遮断します。

</anonymus>

群れる彼らの顔には、警告ウィンドウが面のように張り付いて、まるで木偶のよう。顔が見えないというそれだけで、彼の動作は機械めいて無機質だ。

今こそが、これこそが、我らの求め焦がれた異郷なのだ。彼等は全身全霊をもって叫び続けていた。

「夢の中みたいね」

メリーのいつも見ている光景は、こんなものなのだろうか。私の独り言に、メリーはただ微笑みだけで答えなかった。

事態を治めようと行政も治安維持を始めたようだが、ARが完全に混乱している中では目的地へと無事辿り着く事すらも怪しい。

黒雲と渦巻く風、ばりばりと雷。不気味に鳴り響く鳴き声。

鳥のような、サイレンのようなその怪しげな鳴き声に、訳もなく胸の中に恐怖が湧き起こる。眼を反らしたいという衝動に、反射的に抗っていた。

私達がいるのは、高さ六〇メートル、幅四八〇メートルの京都の街を隔てる壁。

「京都駅」

首都のターミナルステーションは、卯西東海道新幹線ヒロシゲの開通とともに拡充を続け、神亀の遷都と共に再建された。前世紀の記録映像を元に再現されたその構造は、京都で景観条例の例外となっている数少ない建造物の一つ。

その東側——落差三五m、一七一段の石段が作る巨大な空洞。通称、大階段。

ナズちゃんのダウジングは間違いないこの場所を示していた。「——はず、なんだけど」

空に渦巻く黒雲はあれど、肝心の怪物の姿が見つからない。

【宇佐見、聞こえる?】

ARはほとんど機能していない。電源の残量を吸い上げられ、携帯端末は省電力モードだ。教授の声だけが端末の、接続の悪い通信状況の中でかろうじて言葉をつくる。

【……移動してる?】

【そう見える、つてこと。端的にいえば、今回の犯人はプログラムのエラーコードよ。ヤクモクラウドのプログラム。そいつがどういう具合か、意識を持ったみたい暴走してるの。選択の蓋然性、並行世界鏡面——ややこしいことはどうでも良いわね。要は、あいつがどこにいるのか、それが分かれば座標を固定してデコード出来るつてこと】

混乱のさなか、教授は冷静に今起きている事態を説明していた。

これは祭りだ。千二百余年を王都として過ごしたこの国の古き都の、過去と今の交差。

雷——電子の塊、つまり情報の塊。妖怪は鳴き声を上げる。己をこの場に刻み込むように。

千年の歳月をかけて京都に組み込まれた、妖怪たちの記憶。

幻想のレイヤが記述する、幽霊書体。『イラストクリプト』

【宇佐見、マエリベリイ】

教授はいつになく真剣な、真摯な声で告げた。

【さっきの認識の話、覚えてるわね。彼思う故に我在り。自己は他に認められることで自己を確定する。ARの暴走で私たちの認識がずらされて、不確定であること、正体を定めないことがこの混乱を生んでいるのなら、それが何であるのかを観測する力が、それにあらがう力になる】

一息。

【見えず、触れず、いもしないドラゴンは、疑うことによつて殺されるのよ】

ドラゴンに立ち向かうこと。

童殺しは不可能を明日の可能とする研究者のシンボルだ。

「……………」

だから、私はじつと息を潜めて、大階段に視線を凝らす。

ARが使用不能となった今、その座標を読み取ることができないのは、私の眼だけ。だからこそ、私はここにやつてきた。教授に借りた骨董品の赤いACコブラは駅前広場でひっくり返つて煙を吹いている。嚴重注意じゃ済まないレベルだけど、あとで教授に何とかしてもらおう。

「蓮子、気を付けて!!」

「多少の危険は覚悟のうえよ。いつもの部活動と同じ——」

「蓮子!」

突如、金切り声のようなメリーの悲鳴があった。同時に右手が掴まれ、ぐいと引つ張られる。バランスを崩して倒れ込んだ身体が階段の上を転がり、背中を打ちつけて息ができなくなる。同時に、大きな石造りの会談が、刃物で切り落したようにはんと両断されていた。

ちりちりと空気を焼くオゾンの匂い。ぱりぱりと帯電した髪が逆立つ。

「ひ……………」

喉が乾いた空気の音をこぼす。メリーに引つ張られていなければ、私の身体も右と左に分かれて転がっていたかもしれない。嫌な汗が背中に浮きだした。

——居る。

はつきりとそれを確信した。見えないけれど、間違いなくここにアレは居る。

ARに別の姿を重ね書きすることができれば、そこに、誰もいない拡張現実を重ねることで、姿を消すこともできる、つてことなのか。

慌ててコンタクトを洗い流した右目を見開くが、その姿は映らない。

「蓮子、伏せて!!」

言葉と同時にメリーに覆いかぶさられた。

爆音が跳ね、閃光が再び巨大な建築を貫いて揺れる。

「ちよつと……………これは……………なんともハードモードね」

いやはや。残念ながらこちとら健全な一般学生である。怪物と殴り合う度胸も根性も実力も持ち合わせていない花の乙女だ。吹き込む雨風に濡れた石段は滑りやすく、足元はおぼつかない。

しかもその姿が見えないと来たもんだ。雨が帽子を伝い、濡れたブラウスが袖に絡まる。

これじゃあ、相手が何なのかすらわからない。虎だか、猿だか、猪だか鳥だかも分からない、怪物。（モンスター）

ARでも、本来の視覚でも捕えられない、プログラム上の化

物。けれどそれは現実にくこうして存在し、京都の夜を暴れ回っている。

見えない怪物を撃ち殺す魔法の弾なんて、私の手元にはない。

けれど——

「蓮子、前!!」

叫ぶメリーが、しっかりと私の手を握っていた。

「……見えた」

境界の境目を見るメリーの眼は、トリフネに行つて以来進化を遂げていた。接触することで他の人間にもその影響を与え、視覚の一部を共有することができる。それは今回も有効だったらしい。

おぼろげに浮かび上がる怪物の姿。雷を取り巻く、獣とも鳥とも蛇ともつかない化物。正体不明、謎の塊、まさしく人々が理解できない「妖怪」。

ぱりぱりと雷を纏い、甲高い声で鳴く、その姿は——

「——そうか。君は、この京都にいたのだったね」

声が聞こえた。

私のすぐ後ろ、誰かが掲げた宝塔の光が、燦然と空に輝いた。闇を払う法具の光が、雨風を纏い夜霧を纏う妖怪の、その姿を照らし出す。

いるといないの合間に潜み、恐怖の象徴して「いもしない」ものを「いること」にされた結果、名前もなくなった正体不明とされた「鶴」という妖怪。

「やれやれだ。年甲斐もなく昔を思い出したよ」  
瞬間。

空を覆う分厚い雲が晴れていた。  
空に見える全天の星から、美しい月から、私は今を、この場所を知る。

「西暦二千六十五年、十一月五日、午前〇時四七分三三秒!!」

北緯三四度九八分五四・五八秒、

東経一三五度七五分七七・五五秒!!」

「——教授!!」

【聞こえてる!!】

一瞬だった。無数の構文がA Rに流れ込み、当たりを覆い尽くす。A Rに溢れだしたコードの群れが、うねり暴れるプログラムを押さえ込み、無害なものへと書き換えてゆく。

後にはただ、燦然たる輝きの余韻と——  
もの寂しくも不気味な、甲高い鳴き声が響くのみだった。

■■■Sunday, November 6, 2065 at 11:14▲

>quotation>

京都の全天候型制御モジュールは欧州系の資本で開発されたものだが、そのプログラムの一部に誤字があった。欧州はドイツの開発チームが担当した到達不能コードの一部に誤記があり、それがバグの原因となったと推測されている。

今回の事故による被害損失は、市民達の恐慌による二次的な人為要素を除外しても十億新円にも及ぶと試算されており、事態を重く見た政府はヤクモクラウドの更新も視野に入れた対応を迫られ――

</quotation>

<News Sunday, November 6, 2065 at 10:52 NK>

「ねえ、蓮子」

「なに？」

「あの子、結局誰だったのかしらね」

「……そうねえ」

色々な説明は付けられるかもしれないが、どれも納得のいくような形ではないようにも思えた。

残されたペンデュラムを指に絡め、私はふと気付く。

「そういえば、はじめてだわ」

「……何が？」

「私が、夢の向こうから何かを持ってきたのって」

鎖の先にぶら下がる八面体は、プリントアウトされたページの上に静かに揺れていた。

```
<Correction>  
<error>NEU 【意】新し</error>  
<truth>NEU 【意】鶴。キマイラ</truth>  
</Correction>
```

(J)

---

## 【あとがき】

はじめまして、あるいはお久しぶりです。  
折葉坂三番地の銅おりはと申します。

このたびはお手に取っていただきありがとうございます。

この本、『No more Silver Bullet』は、科学世紀の京都を舞台に秘封倶楽部が稀代の天才岡崎夢美教授や助手のちゆりちゃん、そして謎のダウザー少女と共に、京都の夜を脅かす正体不明の怪物と対峙する当サークル二十二冊目のSS本となります。

作中の京都は以前の秘封作品とはちよつと時代を異にしていまして、拡張現実や医療高分子の常駐が日常になった、明確な近未来を想定しています。

蓮台野夜行当時は現代と見分けのつかなかった科学世紀もいまやすっかり未来の出来事。様々な意味で鳥船遺跡の影響は大きかったようです。

あちこちで割と好き放題お遊びを入れてますが、リスベクトというところでご容赦ください。関東出身の自分が京都という舞台を意識したのは、あの戯言使いの独白が最初でした。

いつもながら白身氏、Riz a氏には設定交渉その他様々な形でお世話になりました。この場を借りてお礼をさせて頂きます。

——それでは。

また次の機会にお会いできることを願って。

## 【奥付】

### 「No more Silver Bullet」

平成24年11月4日

科学世紀のカフェテラス2

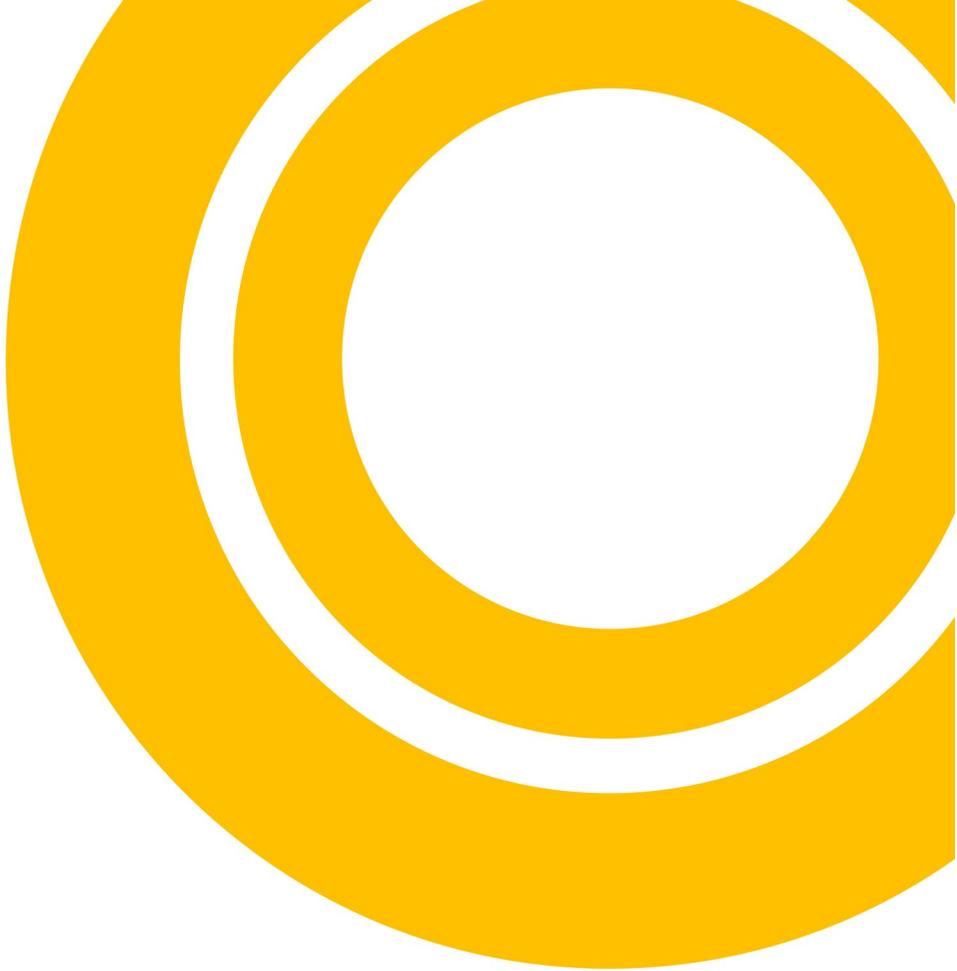
発行 オルハザカサンパンチ  
折葉坂三番地

(<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>)

著者 あかがね  
銅 おりは

※本作は「上海アリス幻楽団」様の  
「東方 project」の二次創作です。





東方project Fanbook 2012.11.4 折葉坂三番地